

『夜を抱く腕』

著：坂井朱生

ill：旭炬

「五百万」

「ご……っ」

どうして、そんなことに。絶句した明に、斉賀は変わらず口元を歪め、薄く笑っている。
とても無理だ。昼夜とわずに働いたとしても、明では一年どころか二年かかっても稼
げるかどうかという額だった。

「いくら奴が売れっ子だっつっても、ちっとばかり厳しい金額だろ」

「売れっ子？」

明は眉根を寄せた。会社員に使うような言葉ではない気がする。

「なんだ、奴の仕事も知らねえのか」

「条件のいい会社に転職したとしか」

「会社ねえ。たしかに普通に稼ぐよりや多少、稼ぎはいいかもな」

斉賀がうっすらと笑んだ。

「エスコートサービスって格好つけた言いかたしてるが、男相手にセックスして金もらっ
てる。そういう『仕事』だ」

「——！」

信じられない。あの生真面目で優等生だった友広が、いったいどうして。

けれど、頭のもう半分で納得していた。昼すぎまで眠り、夜遅くか早朝に戻ってくる
生活。土曜も日曜もなく、平日にいきなり休みだといって一日中眠っていたり。ひどく
痩せだしたのは、いつごろからだったか。

友広が元いた会社の業種すら知らなかったし、明にはそもそも社会人の生活などわ
からない。そんなものと気にしていなかったが、不規則な生活の理由はこれだった
のだ。

（でも、友さんが）

なぜこんなことに。やはり、生活を維持するのが大変だったのか。明が高校を卒業し、
アルバイトをはじめてからは生活費も折(せつ)半(ぱん)するようになったけれど、それ
までは生活のすべてが友広一人の肩にかかっていたのだ。

これも僕のせい——か？

ますます、胃が重苦しくなる。ならばよけい、明はここから逃げられない。事情も内
容もわからないが、三カ月、明がここにい続けられれば、友広は解放されるらしい。

どこかに監禁でもされているのだろうか。無事でいてくれるのか。

ここへ来る直前まで、友広は家にいた。ならば明が外へ出たあと、とらえられたのか。
それとも、そうなるかわかっていて、明を急かしたのかもしれない。

（友さん、無事でいて）

明には祈るより他になにもできなかった。

「どうして、そんなことに」

「知りたいのか？ 今さら聞いても変わらねえだろ」

「教えてください」

友広は客に請(こ)われてカジノへ出向き、そこで負けた。十五分もあれば百万くらい簡単に積みあがる。負けを帳消しにしようとムキになって勝負すれば、さらに負債が膨れあがるという仕組みだ。

実際に賭(と)博(ばく)に手をだしたのは友広ではなく一緒に行った客で、けれどその客が逃げてしまったせいで負担が友広に押しつけられた。そういう事情らしい。「ま、死ぬ気で稼ぎやどうにかなる金額だが、期限が足りねえ。必死で頼みこんでどうか三カ月延びたようだが」

休まず働いたところで、よほど上客でも捕まえなければ厳しい。仕事が仕事だけに身体が資本で、倒れてしまえば最後だ。

八(はっ)方(ほう)塞(ふさ)がりの友広が頼ったのが、斉賀だった。

「斉賀さんが、そのカジノを経営されているんですか」

「いや。ただ知ってるってだけだ。俺はギャンブルもやらねえしな」

「じゃあ、どうして」

「おまえの兄貴が自分を買えって言ってきただけだ。好みじゃねえし断ったんだが、だったら弟はどうだ、とさ」

斉賀が可笑しそうに笑った。

「てめえの借金返すカタに弟さしだすってのも、たいした兄貴だよなあ」

兄弟といっても自分たちは血縁ではないし、苗字すら違う。友広には明の面倒をみる義理はなかった。今まで、面倒をみてくれていたのすら不思議なほどだ。それでも彼は明が高校を卒業するまで、ずっと支えてくれていた。アルバイトをはじめてからも、学費のために貯金しろと言ってくれていたのだ。

「騙(だま)されてここまで来て、ご苦労なこった」

友広がなにを考えて明を寄越させたのかはわからない。斉賀が呆れていたのは、このせいだったようだ。騙されてのこのこと現れた明を、嘲(あざ)笑(わら)っていたのだ。

明は唇を噛みしめた。ショックはある。あたりまえだ。まさか、友広に騙されたなど今の今まで考えもしなかった。様子がおかしかったのも、これで納得がいく。

(友さん——)

騙すとか騙されるとか以前に、友広の身が危ないなら、明が逃げるわけにはいかない。

どうせ、明の身など誰も気にしない。親しくつきあっている友人の一人すらいないし、家族は友広一人だ。

明がどうなろうと、誰も心配しやしないのだ。ならば、友広が今までの分を返せというなら、それに従えばいい。

「そう、……ですか。それで僕は、なにをすればいいんでしょう」

自分でも驚くほど平坦な声だった。

「どうなるかわからないってのに、怒りも泣きもしねえんだな」

泣いて事態が変わるなら、そうしてもいい。けれど今は、友広を助けるのが先だ。

「僕がなにをすれば、兄が助かるんですか？」

話は理解した。友広がせっぱ詰まった様子を見せていたのも腑(ふ)に落ちる。だがどうして明が友広の『代償』になれるのかがわからない。

(買う——ってそういう意味、だよな)

友広は斉賀に、自分を買えと言った。その代わりに明が寄越されたのだとしたら、同じようにしろという話だろうか。

これが女性なら話がわかる。もしかしたら、男でも利用価値があるのかもしれない。身体をさしだして金銭を得る、友広の仕事もその類だったようだ。だが五百万円という大金だ。明のどこに、そんな商品価値があるのだろう。

斉賀と友広は、いったいどういう関係なのだろう。斉賀の言い分によれば友広から話を持ちかけたというし、単なる知りあいというだけでもなさそうだ。

「兄からは、住みこみの家政夫だと聞きましたが、違うんですね」

「まんざら外れでもないがな。俺は愉(たの)しめる奴で、ついでにメシでもつくれりや上等だとは言ったさ。どうせ見つかりやしねえし、言いたい放題で条件もつけた。おまえ、そんな仕事できるのか」

「先ほども言いましたが、家でする程度になら、一応。自己流ですが」

「ふうん。じゃあ、そいつも頼もうか」

斉賀はひとと明を見据えた。薄い色の眼(まな)差(ざ)しは鋭いばかりで、なにを考えているかなど明にはまったくわからない。

「さっきからまるで他人事みてえだな」

「現実感がないんです」

「それでも、少しくらい動揺しそうなもんだが。まあ、いい」

斉賀が前髪をうっとうしげに払った。また、煙草を銜えて火をつける。

「俺は直接には関係ねえ。暇(ひま)つぶしにちょうどよさそうだから、話にノッただけだ」

暇つぶしだと、斉賀は言った。死んでやるのも莫迦(ばか)しいし業(ごう)腹(はら)だから、ただ生きてるだけ。おかげで毎日退屈でたまらない。

「愉しませてくれるなら、奴の負債を肩代わりしてやるよ」

「僕は、なにをすればいいんですか」

「俺の相手。おまえの兄貴と同じ『仕事』だ」

つまりはセックスの相手。そういうことだ。

技術も体力もない自分に、いったいなにができるのだろう。容姿だって、華やかな友広に比べて、明は今までずっと暗いと言われず、いいところ並だ。

「三カ月だ。三カ月、おまえがここを逃げださなけりや、俺がチャラにしてやる。カジノでつくった借金なら、賭けで決めるのが筋だろ」

「そんなことができるんですか」

「端金だって言っただろ。おまえの兄貴は、まあ、保釈中ってところだな」

斉賀が助けてくれると、そういう話らしい。

「信用しようがしまいがどうでもいいけどな、とりあえず殴(なぐ)る蹴(け)るってのはしねえよ。おまえみたいなひよろいの殴ったところで、つまらねえだけだ」

どう答えたらいいのだろう。明は困って、唇を噛んだ。殴られるのも蹴られるのもごめんだが、明に止める権利はなさそうだ。

「……たすかります」

さんざん探して、結局それだけを言うと、斉賀は虚(きょ)を衝(つ)かれたように目を軽く見開き、そうして小さく吹きだした。

「なんだそりゃ」

「他に、どう言ったらいいかわからなくて。可笑しかったですか」

「やったことあんのか」

「ないです」

「女は？」

「ありません」

そんな余裕、どこにもなかった。

中学の途中で父を亡くし義母がいなくなり、友広と二人、ぎりぎりの生活をしてきた。ちょうど異性に興味がでる時期だったのだろうが、それどころではなかったのだ。

「まさかとは思うが、なにされるかわかってねえとか言うんじゃないだろうな」

「たぶん、理解できてると思います」

「安心しろ、壊しゃしねえよ。しばらく愉しませてもらうんだ」

「心配してません」

「そうか？」

疑わしげな目を向けられるが、本当だ。

男同士の行為がどういうものか臍(おぼろ)気(げ)にはわかるが、経験がない。同性どころか女の子とキス一つしたこともなくて、どう心配したらいいのかすら定かではないのだ。

(僕にできるのか)

考えられるのはそれだけだった。できなければ、友広の身が危うくなる。できようと思えば、齊賀の言うとおりにする以外、明にはどうしようもなかった。

本文 p36～45 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>